

科学技術高校

生徒による

いきもの記

Vol.136 2025.3.25

1年5組 増淵 祥太郎

山本 倉時

(科学研習部生化班・鳥研究／昆虫研究)

言語文化とのコラボレーション！

『東下り』で想像された^{あづまくだ}鴨と^{シギ}『鳥展』について

2024年11月2日～2025年2月24日に、上野の国立科学博物館の特別展で「鳥展」というものが開かれた。そこでは、400点以上の標本が展示されており、実際の大きさや鳥の細かい特徴を見ることができた。また、鳥の雑学や研究データも掲載されていて見どころ満載だった。

さて、1年生の言語文化の授業で「東下り」を学習した。その中で、京都から来た主人公たちは、隅田川のほとりでユリカモメ（都鳥）を初めて見たとき、「さる折りしも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴨（シギ）の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。（訳：白い鳥で、くちばしと脚が赤い、鴨ぐらいの大きさの鳥が、水面を気ままに動きまわりながら魚を食べています。）」と話していた。この「鴨」とは何のことだろう。特別展では、実際に鴨の剥製がいくつか展示されていた。シギ科は日本で58種類、世界で89種類いる。そこで、主人公たちはどの鴨を想像してユリカモメを指したのか考えてみた。

まず、京都に生息している鴨を調べてみた。すると、チュウジシギやチュウシャクシギ、ツルシギ、キアシシギ、オオジシギなどがいた。

次に、物語で主人公たちは、「鴨の大ききなる」と言っている。このことから、ユリカモメと同じぐらいの大きさの鴨だと思う。ユリカモメの平均的な大きさが約40cmなので、これと同じぐらいの大きさの鴨について調べてみた。すると、チュウシャクシギが最もユリカモメの大きさに近かった。以上のことから、主人公たちが想像した鴨は、チュウシャクシギだと考えることができる。



ちなみに鳥展の最後辺りの展示の中に左図があった。これは日本全国の都道府県を代表する鳥を表したものだ。前述したユリカモメももちろん含まれているが、違う県でかぶっている鳥がいるなど、地域のことも鳥のことも興味を持てる。まだ書ききれないほど魅力の多い鳥展は東京開催は終わったものの、現在は名古屋市で開催されている。興味を持った方はぜひ足を運んでみてほしい。



チュウシャクシギ。これが東下りに登場したシギか？！

チドリ目シギ科に分類される鳥類で、主に北アメリカなどの寒帯、亜寒帯地域で繁殖を行った後、いくつかの国を渡り、越冬する渡り鳥である。日本では、春や秋に渡って来る旅鳥として知られている。

名前の由来は、特徴的な曲がった嘴からきている。その嘴を利用して干潟の砂中に生息している甲殻類などを捕食している。



鳥展を楽しんだ後の山本の写真